タイでの研修を終えて

書いた人　K.W さん

まず、本当にタイに行ってよかった。多くの人に出会えてよかった。これを無駄にしたくない。約一週間の研修を終えて、私が感じたこと、考えたことをここに日ごとに書き留めていきたいと思います。また、写真も添付していきます。

21 日

私にとっては今回が初海外で初飛行でした。前日の夜からタイで過ごす１週間を想像し、ワクワクしていました。また、自分は今回の研修で多くのことを得たい、いや、受け身ばかりではなく自分から学ぼうという気持ちで日本を旅立ちました。タイに到着してまず、日本の夏とは違った暑さと行き交う車や原付に驚きました。

そして、ナイトバザールでは、タイ料理を食べ、気さくに話しかけてくれる現地の方々と交流しました。また、ホテルではお湯が出ない、電気がつかない、コンセントがさせないなど旅の醍醐味であるハプニングが続出しましたがそれはそれでいい思い出になりました。

22 日

朝はホテルの朝食を優雅にいただきました。やっぱり、アジア圏。米に合う料理は美味しく、フルーツもどれもはずれが無く甘くて美味しかったです。

そして、お腹がいっぱいにしてからは、ワロロット市場でお買い物をしました。中野さんからモン族が伝統衣装を売っていることを教えてもらいました。服一つをとっても、民芸品一つをとっても各部族の色が出ていて多民族国家であることを目に見て体験できました。

お買いモノを終えて向かったのは蛇を祭った「ワット・チェット・ヨート」でお寺を見学。ところどころ、ビルマ軍の攻撃の跡がありました。また、僧侶をはじめとし、お花やお供え物などの多くが幸福の黄色に身をまとっていました。その後は、博物館ではタイの歴史を学びました。特に大仏の足の裏にタイ語が独特の模様で刻まれていました。

そして、次はロイヤルプロジェクトへ向かいました。このロイヤルプロジェクトは故プミポン国王をはじめとするタイ王室が推進している農民支援プロジェクトです。そのため購入する事によって社会貢献に役立ちます。どれも品質が良く、お手頃な価格で買えるものばかりだったので沢山買ってしまいました。

お買い物を終えてからはチェンマイ大学へ日本語を専攻している学生たちとの交流に向かいました。まずは私たちが、日本の文化・南山・タイに来た理由をプレゼンしました。私たちのプレゼンを一期一句聞き逃さないように前のめりになりながら聞いてくれました。また、日本語の弁論大会が近いということで参加する学生のスピーチを聞きました。自分の病気や日本留学、タ

イの性問題についてなど考えさせられるものばかりでした。その後の交流では、いくつかタイ語を教えてくれました。話している途中にふと、あ、普通に日本語で話しているけどこれって普通じゃないなって気づかされました。私たちももっと相手の国の言語を学ぶべきだったと少し後悔しました。やはり、言語の壁は大きかったです。ですが、言語ではなく音楽というコミュニケーションツールとして盆踊りをすることによって全員で楽しむことができたのは嬉しかったです。

23 日

ホテルから 2 時間ほどかけて、念願のｚｓ暁の家へ向かいました。舗装されていない道を移動するのは、少し疲れましたが外を眺めているとあっという間に暁の家に着きました。到着するとすぐに研修生や奨学生の方が水を持ってきてくださったり、部屋の案内、荷物を運んでくれたりと初めて会った私たちにとてもやさしくしてくれました。その後は、暁の家で採れた野菜やフルーツを使ったおいしい料理食べました。それぞれの器によそってある料理は 1.5 人分くらいあるのではないかと思うくらい多いのですが、さらにおかわりも用意してあってみなさんのおもてなし精神に驚かされました。

昼食後は、浴衣に着替えてから暁の家の研修生や奨学生の方々との交流会に参加しました。まずは、暁の家の方々が日本語とタイ語で書かれたカードを用意してくださり、伝言ゲームをしました。タイ語を私たちは全く勉強していなかったのでうまくコミュニケーションがとれるか不安でしたが、言語を介さず、ジェスチャーや表情だけでゲームができるので、みんな一瞬で笑顔になれました。

このゲームで負けたチームはみんなで恋するフォーチュンクッキーを踊りました。その後は、研修生の方々は、アカ族の伝統的なもの踊りをいくつも披露してくださいました。また、奨学生のかたたちは、タイの POP ミュージックのダンスを踊ってくださいました。みなさん、カラフルな装飾のついたきれいな民族衣装をまとい、タイの伝統的な音楽にのせた踊りは本当に素敵で、見ていてうっとりしてしまいました。その後は、わたしたちがちびまるこちゃんの踊るぽんぽこりんのオリジナル盆踊りを踊り、最後は、暁の家の方々とも一緒に輪になって踊りました。言葉が通じなくても、皆が笑顔になって交流できたことはとても楽しく、素敵な経験になりました。

夕食とお風呂を済ませた後は、中野さんにルンアルンプロジェクトについての学習会を開いていただきました。教育に興味のある私にとってはとても濃い勉強会になりました。中野さんは、30 年前にタイを訪れました。その当時は、日本人に対する風当たりはとても強かったそうです。ですが、山岳民地帯の人たちはやさしく迎えてくれた。そのやさしさ（精神）は山で培ったもの。それを失ってほしくない、守っていきたい。ここでずっと暮らしてほしい。そのために山を豊かにしたい。その気持ちから山岳民地帯の人たちが永久的に山で住み続けられるように、教育・環境保護・コミュニティの継続の 3 つに力を注いでこられました。まずは教育です。山岳民地帯の人たちの中には国籍を持てない人がいました。そして、国籍を取得するためには学歴が必要。そのため、リス生徒寮を建て山岳民地帯の子どもたち進学できるようにサポートし続けてきました。ですが、タイも十分に発展してきたことから、5 年前に寮は終了させ、山に住む民族の人たちに教育支援、研修生を受け入れ、奨学金という形で支援（大学まででてほしい）を始めました。また、保育園でのサポートもしています。保育園から支援している理由は、山岳民地帯の人たちは民族言語が中心だったため、いきなり小学校からタイ語での授業にはなかなか追いつくことができず、多くは大学に行けないことあったことから保育園も支援しているそうです。今は、就業支援や学外サポートなど学生にとどまることなく、教育の支援をしています。次は、環境です。中野さんは、環境の中でも持続可能な農業（コーヒー）に力をいれていらっしゃいます。現

在は、スタッフ６人、研修生２人で管理をしていて、中野さん曰く彼らはプロジェクトを支える原動力だと教えて頂きました。また、コーヒーの栽培において一番重要なことは何ですかという質問には、栽培方法よりも加工が大切だと教えて頂きました。忙しいからといって手を抜いてはいけない。また、公害のことも考慮して有機栽培にこだわる。有機栽培は収穫できる量が少なく、不ぞろいだが 30 年前からこだわっていることだからこれからもこだわり続けたいそうです。また、コーヒーばかりに依存するのは良くないため他の作物も検討しているそうです。また、中野さんは農業に対する思いについても教えてくださいました。環境（農業）に興味をもったのは、タイで暮らすようになってから日本の環境と比較し、人が幸せなのは自然との調和があってこそだと気づいたからだそうです。タイでの生活は朝日が昇ると同時に始まり、日が沈むと同時に終わる生活で、日々、自然に生かされていると実感しているそうです。ですが、昔は、タイの背骨と言われていた農業は収入が少ないため時代が変化するにつれて蔑ろにされている現状。この現状を変えるために環境（農業）に力を入れているそうです。でも、押し付けるのではなく、楽しみながら学んでもらう工夫をしていらっしゃいます。最後は、関わり合いです。今回のルンアルンプロジェクトも新たな関わりを広げる一つの良い機会だったそうです。その理由は、スタディツアー、文化交流などは言葉が通じなくても音楽やおどりを通して心と心で通じ合えるからだそうです。どのため、それらのコミュニティを広げ、継続させるきっかけの一つとして、伝統芸能を大切にしているそうです。大切にすることでコミュニティの絆を強めたり、団結力につながる（復興のときなどに団結力があればその振興もはやい。）と教えて頂きました。そのため、山岳民地帯の子どもたちに、踊り、歌、儀式の意味をしっかり理解することで自分の民族とはなにか分かってもらえるように活動しているそうです。また、どうして様々なことに挑戦できるのですか。怖くありませんか。また、壁にぶち当たったらどうしていますか。という私の質問に対して『切実であるか』が大切だと答えてくださいました。問題にぶち当たったら、そのプロジェクトにたいして切実にしているかどうかで変わり、切実であればあるほど、必ずピンチには支えてくれる人がいう中野さんの言葉にとても納得させられました、

24 日

この日は、少し早く起きて暁の家のガーデンツアーに参加し、野菜ややコーヒーを作る過程についての説明を聞きました。また、コーヒーの焙煎機や各農家から送られてきたコーヒーを見せてもらいました。

そのあとはワゴン車に乗って山へと向かいました。コーヒーを育てている山まではアップダウンの激しい道のりで運転をしていなくても疲れてしまい、中野さんや農家の方たちここを通っていると驚きでした。実際に、訪れてみるとコーヒー豆が育てられている農園は標高が高く、空気がとても澄んでいました。そして、なによりも「ここ、降りられるかな」と不安になってしまうほどコーヒー木が植えられている場所は急斜面でした。

この広く、急斜面なところで育てるのはとても大変だということが実際におとづれたことで実感できました。なによりも無農薬で栽培されているコーヒー豆は、農家の方々が一本一本にどれほどの時間と労力をかけているのだろうと考えると、どうしてルンアルンのコーヒーが美味しいのか分かった気がしました。そして、山小屋で食べるロージーさんとヤーシーさんの手作りご飯は格別美味しく感じられました。

そして、今回は暁の家の卒業生の方とロージーさんのお宅にホームステイをしました。私はロージーさんのお宅に泊まりました。ロージーさんの親御さんは日本語も英語も話せなかったので、最初はどのようにコミュニケーションを取ったらいいのだろうと戸惑ってしまいましたが、お母さんが笑顔で食事を運んでくださったことで、不安が吹っ飛んでしまい、身振り手振りでコミュニケーションが取れました。

25 日

標高が高いということもあり、朝はとても寒かったのでさが、ロージーさんたちが早起きをして用意してくださった朝ごはんのおかげで、心も体も温まりました。そして、皆さんとお別れをしメーコックファーム財団に向かいました。お昼は川のほとりに位置する素敵なレストランでいただきました。そして、楽しみにしていた象乗り体験に向かいました。象の乗り心地は意外とよかったのですが、川の中を歩いた時は少し怖かったです。どの象も象使いの指示通りに進みお利口だと思いました。また甘えん坊だったり、ダンスが好きだったりと一頭一頭に特徴があるのだと象使いの方に教えていただきました。帰りには、象のフンから作られた写真立てを購入し、いいお土産が買えて幸せでした。夕方には、メーコックファーム財団に着きました。そこでは麗澤大学の学生さんともお会いしました。夕食を頂く前に中野さんからメーコックファーム財団のこれまでの歩みや、中野さんが同じ子どもたちを支援するメーコックファーム財団を訪れたかっ

たという理由について聞きました。そして、その後は子どもたちと一緒にご飯をいただきました。子どもたちは、私たちのご飯を配ぜんをしてくれて、タイ語でありがとうと伝えると笑顔を見せてくれました。その後の交流会では、民族衣装を身につけた子供たちが伝統的なものからポップなものまで何曲も踊りを披露してくれました。とても可愛かったです。交流会の最後にはみんなで輪になり、踊るポンポコリンを踊れて楽しかったです。言葉は通じないものの、みんなが笑顔になり一体感を作れたことに胸が熱くなりました。標高が高いということもあり、朝はとても寒かったのでさが、ロージーさんたちが早起きをして用意してくださった朝ごはんのおかげで、心も体も温まりました。そして、皆さんとお別れをしメーコックファーム財団に向かいました。お昼は川のほとりに位置する素敵なレストランでいただきました。そして、楽しみにしていた象乗り体験に向かいました。象の乗り心地は意外とよかったのですが、川の中を歩いた時は少し怖かったです。どの象も象使いの指示通りに進みお利口だと思いました。また甘えん坊だったり、ダンスが好きだったりと一頭一頭に特徴があるのだと象使いの方に教えていただきました。帰りには、象のフンから作られた写真立てを購入し、いいお土産が買えて幸せでした。夕方には、メーコックファーム財団に着きました。そこでは麗澤大学の学生さんともお会いしました。夕食を頂く前に中野さんからメーコックフ

ァーム財団のこれまでの歩みや、中野さんが同じ子どもたちを支援するメーコックファーム財団を訪れたかったという理由について聞きました。そして、その後は子どもたちと一緒にご飯をいただきました。子どもたちは、私たちのご飯を配ぜんをしてくれて、タイ語でありがとうと伝えると笑顔を見せてくれました。その後の交流会では、民族衣装を身につけた子供たちが伝統的なものからポップなものまで何曲も踊りを披露してくれました。とても可愛かったです。交流会の最後にはみんなで輪になり、踊るポンポコリンを踊れて楽しかったです。言葉は通じないものの、みんなが笑顔になり一体感を作れたことに胸が熱くなりました。

26 日

朝は舟で移動しました。船からの景色は車からの景色とは一味違って見えました。そして、そこから車で移動し、タイ洞窟事件の博物館へ向かいました。ニュースで少し知っていましたが、博物館にはどうやって援助したかなどの説明や模型などがあり、当時、どのような状況だったのかを知ることができました。また、助けられた子どもたちは出欠ささたり、この事件で亡くなられた方の遺影の周りには黄色の花束が多くの手向けられてあり、タイの人々は他者への愛情や感謝、尊敬が深いことが伺えました。その次にラオス、ミャンマー、タイの三国の国境が交わっているところに行きました。お昼はソムさんオススメの雲南省のラーメン屋さゆに連れていってもらい、ラーメン、餃子、小籠包を食べました。お昼食べたあとは、麻薬博物館に行き麻薬の歴史、麻薬の怖さを改めて知りました。博物館には、かなりグロテスクな模型や写真が展示されており、当時の麻薬の恐ろしさを感じられました。そして、夜には暁の家に戻り、久しぶりに奨学生のみなさんと再会しました。

27 日

暁の家での最後の朝食を終え、身支度を済ませ、車に向かうと中野さんがコーヒーを淹れて待っていてくださいました。そのコーヒーの味はこれまでにないほど奥深く、美味しく感じられました。そして、奨学生のみなさんが手作りのミサンガを私たち一人一人にプレゼントしてくださいました。そのミサンガは暁の家での御縁を思い出せる大切なものになりました。そして、これまでに通ったことのないほどの山道を進み、堀内佳美さんがいらっしゃる村まで向かいました。その村には、堀内さんが初めて設園した太陽の家がありました。

堀内さんは、全盲というハンディキャップがありながらも 2010 年にアーク本読みたいを設立し、農村部などの本が極めて少ない地域を中心に図書館の設立や移動図書館の活動を行なっていらっしゃいます。そして、私はたちが訪れたシップラン村ではアカ族の子供たちが就学の準備ができるようにと設立されました。

まずは、子供たち一人一人がタイ語で練習してきた自己紹介や歌、アルファベットの発音の練習を見せてくれました。また、その後の質問タイムでは、太陽の家で 8 人のごとものお世話をしているナレー先生からもお話を聞くことができました。ナレー先生は、子どもたちに小学校で苦労しないまでのレベルまでタイ語を習得できるようにであったり、健康にいいようにすごく考えていらっしゃいました。そのため、アルファベットやタイ語、運動などのスケジュールを細く決めていらっしゃいました。1 人の子供のお世話をすることですら、大変なことなのに 8 人の子どものお世話をするナレーさんですが、子どもの笑顔をみると仕事を頑張れると話してくださいました。また、ナレー先生やこの村との出会いの話も素敵でした。健康ボランティアをしていたナレーさんと通

訳をしていた堀内さんは救命救急研修で出会ったそうです。そこで、お 2 人はたくさんお話しをするなかで太陽の家の案が出たそうです。もともと移動図書館をするつもりでいた堀内さんは、タイ語が話せない、読めないところにただ本を持ってくるだけではだめだと分かり、ナレーさんにどうしたら子供の役に立てるかと聞いたところ、教育の下地となるような施設が必要だとなったそうです。最初は、専門分野でもなく、初めての試みだったので堀内さんは不安でしかなかったそうですがね、子どもに重きをおくことに変わりなかったことから太陽の家の設立に足を踏み入れたそうです。また、堀内さんは開発についてのお話をして下さいました。まずは、ニーズスタディはお金や時間がかかっても、めんどくさくてもその地域の本当に求めているものは何かを見極める必要があるということを教えて下さいました。また、堀内さんがしている活動、開発は本当に意味があるのか。押し売りやエゴではないのか、だってタイの人は本を読まなくても幸せそうなんだもん。けど、その答えは私が好きだから、好きなものを勧めるのは自然なことだし、相手がいらないと言っても、自分が信じているものだから挫けない。とおっしゃってくださいました。この答えは心にストンと落ちてきて、自分のぽっかり空いていたところを埋めてくれました。自分がこれからやりたいと考えていることを始

められる自信を堀内さんからいただきました。話を聞き終えた時には、堀内さんが全盲でいらっしゃることを忘れてしまっていましたが、堀内さんの行動力と情熱は凄まじく自分は何をしているだ、もっと頑張れと奮い立たせてくださいました。本当に素敵な出会いをさせてもらいました。ナレー先生の家で美味しいお昼ごはんをいただき、お別れを告げで空港へ向かいました。これまで、ずっとドライバーをしてくれたソムさんや中野さんとのお別れはとても寂しかったです。中野さんと最後に握手をさせていただいたとき、この分厚く温かい手が多くの人との縁を生み、私もそのご縁に入れたことはとても幸せだと心の底から思いました。